
家庭内戦争

桜井莉沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭内戦争

【Zコード】

N2154B

【作者名】

桜井莉沙

【あらすじ】

これは、斎藤恵実の壮絶な、家庭内戦争の物語である。

プロローグ

ここに勤めて早10年。
いろんなことあつたな。

『編集長』

ここに座るのは1日目か…。ジャーナリストは同僚も敵。外に出ても敵だらけだからな。この先も苦労しそうだ。ううん。でも昇進おめでとう…！自分…！

こんなことを思つてた私のところに昨日まで同じ立場だつたこの敵だらけの世界のなかで唯一の親友、宇野 陽子がやってきて、「うつわー！ほんとに編集長のところにいるつ！昨日まで私の隣で力チャ力チャと来月の企画を打つてた人が！ね。戸辺編集長！」
「嫌みにしか聞こえない…。」

「まあ一応嫌み。だつて、上になつたからつてだけで「これ、こうですか？」とか玲に言いたーないもん！なんか…違和感が…。」「私に「これ、こうですか？」とか言つてる自分を想像したら気持ち悪いと言いたいわけだ？」まあ。自分もちょっと違和感があるんだけどね。

「うん。それだけ。だつて私は別に上に行こーとか思つてないもん。だから玲が上に上がつたことは、なんとも思わん。」

「そつか。」でしうね。

「あ。で、今日バイトの子が来るのよ。1階のフロアで待たせてるの。昨日まで編集長だつた大泉編集長に『バイトを会社までつれて来い！』って言つてたから。『連れて来たら、あとは戸辺がどうにかする…』って。なのでバイトをフロアから、ここまで案内するのは編集長の役目だから。では、いつてらっしゃーい！」

「ハイハイ。」

キイ。 椅子から激々立ち上ると私たちが働く4階の編集室を出た。

私の働く会社はビルで1階にはカフュやロビーなどあつて、のびのびしている。アルバイトの方にとつてはとつてもいい空間だ。1階だけだが。あの所は最上階以外ほぼつるさー。

エレベーターが、『1階です。』と言つたと同時に目の前の戸が開いたので出てそれらしき人を自慢の視力2・5で探した。約2秒であつたり見つかってしまった。

そのバイトはキヨロキヨロしていて『わーー!』つて周りの人などに自分が圧倒された感じの女性だった。私より10は若いだろう。本当に10ピッタリ違つてたら、あの子20ちょうどか…。若いね〜。ん〜。自分ももう30。来年には31。…つてなんでこんなことを。

気を取り直した私はそのバイトっぽい子に話しかけた。

「宇野に連れてこられたバイトさん?」
「はい! これ履歴書です!」

そう言つて履歴書を見せられた。

…椎名美羽。ふーん。短大出でんのか。

と名前と学歴をちょちよいと見て、

「じゃあ椎名さん。案内するから。」

と、言つてさつき乗つたエレベータに今度は2人で乗つた。

『4階です』と、また戸が開いた。それと同時に電話の音。コペー機の音。

バイトさんは「なるほどー大手の出版社はこれほどまでに騒がしいのか!」と思つたことだらう。やっぱりちょっとびっくりしていた。私も10年前は同じように驚いた。

戸を開けて中に入った。彼女のこれから使うことになる昨日まで私が使っていたデスクのところに案内した。このデスクは昨日、私が約1時間かけて荷物を編集長の所に移動。整理。片付けをしたデスクなのだ。

「ここが今日からあなたのデスク。困ったことがあつたら、となりの宇野に聞いて。」

「はい。分かりました。」

「よろしくね。」陽子。あなたは相変わらず後輩には優しい。下は妹みたいで、かわいいのだろう。

心の中で思った。

「あの、」バイトが口を開いた。聞きながら陽子にバイトの履歴書を渡した。

「なに？」陽子はすかさず聞き返した。

「あの人、なんか避けられてるよう見えるけど何ですか？」

バイトは、齊藤 恵実を指差して言った。

「あー。あの人はね。齊藤恵実って人で親に相当やばいことされて、その復讐に親の記事を書いて親を刑務所送りにしたらしいよ。ここじゃ有名でみんな人間じやないって言つてるの。」陽子の言つてることは噂だ。でも、その噂は嘘のこともあるし本当のこともある。私は、本当のことすべて知つている。私は誰にも言つてないが、つてゆうか言えないが齊藤さんには共感できる部分は多々ある。

その齊藤さんの人生を変えたあるひつことを私は知つている。

そう。あれは半年前のことだ。

プロローグ（後書き）

では、人物設定を紹介します。

齊藤 恵実〔女・28才〕

主人公。プロローグはちょっとしか出てないです。

戸辺 玲〔女・30才〕

編集長に昇進した普通のジャーナリスト。視力2・5。

宇野 陽子〔女・30才〕

玲の唯一の親友。後輩にはわかりやすいぐらい、優しい。

大泉 洋介〔男・48〕

前の編集長。自分が今まで作っていた人気雑誌の編集長の座を部下の玲に譲った。

その後、ほかの雑誌の編集長についたらしい。

椎名美羽〔女・21才〕

短大卒業。社会人1年生。バイト。玲が、編集長になつた1日目に来たバイト。

つて感じです。

これは、フィクションです！（一応）

第1話

齊藤恵実。

現在、彼女は同僚や部下、先輩たちにも恐れられている。彼女は昔は明るい女性だった。私と同じぐらいに。

あれは、3年前の夏のことだ。

私はあの日も『来月の企画を早く書かねば!』と焦っていた。そんな頃だ。齊藤恵実が私も働いているこの人気雑誌の編集室にまでたく移動となつたのは。

「えー。今日からここに移動になつた齊藤恵実さんです。」

大泉編集長が朝9時ごろに皆の前でそう言つた。

隣の齊藤 恵実という女は大泉編集長がそう言つと、

「齊藤恵実です。『スポーツ』の編集室から移動になりました。この度、この1番人気のある『芸能ポスト』の編集室に移動になつてうれしく思います。よろしくお願ひします。」

そう彼女が言い終わつた後、またいつも騒がしい空気この編集室は包まれた。

「...スポーツ...。あーーうちの会社のスポーツ雑誌で4・5番目に売れてる雑誌か!」

「つていうかウチの雑誌、一番売れてんだ!初めて知つた!」

「よろしくお願ひします。」

話しかけてきたのは齊藤恵実だった。昨日まで空いていたデスクは彼女が座るためだったことが今、分かつた。齊藤恵実は育ちがいいのか、あのベビードールの香りがした。私はこの香水の匂いに関し

ては分かるのだ。何故かは1回使つたから。ただそれだけ。
「あー。よろしく。」

私はそつとパソコンに向かつて企画書をつち始めた。

お昼12時15分。締め切りギリギリの企画書がやつと仕上がつたのでゆつくり1階のカフェで、昼飯でも食べよつと編集室を出た。

「あのお昼ですか？」

背中から声が聞こえたので振り返つた。斎藤恵実だつた。

「そうよ。」

「一緒に食べてくれませんか？」

「いいけど。」

こんなことで私は斎藤恵実とご飯を食べる事になつた。

私はシーチキンパスタを食べながら聞いた。

「斎藤さんつて親何やつてんの？」

「え？」

「あ。いやね。朝、話しかけられたときベビードールの香水の匂いしたから。」

私は、後輩には陽子と違つて失礼もクソもない人間なのだ。いじめはしないですが。

「あ。これは貰い物です。何で分かるんです？」

「1回使つたから。それだけ。ところで何やつてんの？ 親？」

「政治家です……。」

「ふうん。……つてす」「じやん！ で誰？！」私は少々ビックリ氣味で聞いた。

「斎藤隆一です。」

「ふうん。……つてマジで？！」

「は……はい。」斎藤恵実はどうどん困つていいく。

とにかく斎藤隆一つて言つたら、かなり有名な政治家さんだ。

ちなみに民主党に入っている。

これが私と齊藤恵実の出会いだつた。齊藤恵実はこの業界に入つたことによつて後に齊藤恵実の運命そして齊藤恵実の父の運命も変えることになるとはまだ思つてもみなかつたことだらう。

第1話（後書き）

1話（今回）の、追加の人物紹介です。

斎藤隆一

サイトウ リュウジ

恵実の父親。

政治家。

「今回の企画…？」

思いつかへん…。

齊藤恵実と昼ごはんを食べて1時間が経つた。さつき企画仕上げたと思ったら、また考えなければならない。

齊藤恵実は私のアシスタントになつたらしい。『なんで齊藤さんが私のアシスタントに付くんですか？』つて大泉編集長に聞いたら『席が隣だから。戸辺アシスタントが付くということは指導係にもなつたことにもなるから。齊藤の指導係、戸辺に任命！』と言われてしまつた。最悪だ。

よつて今、私の隣には齊藤恵実が座つている。

指導係になるということは2人分の仕事をするようなものだ。

こここの芸能ポストの編集部は変わつていて新人にもバイトでなければ仕事をさせる。

要するに企画を書かせて面白かった場合、それに相応しい要するにトップページに載せてくれたりと上手くいけばいきなり連載企画を書かせてくれたりする。

急速に昇格したいという人にとってはもつて來い！の編集部なのだ。

しかし指導係に任命されてすでに連載企画も持つていて、そこそこ忙しい人にとっては指導係というのは絶対に回つてきて欲しくない係なのである。

だつて、指導係になつたら自分の会議、打ち合わせにも取材にも新人が自分の後を付いて回つて新人に「これ、どういう意味なんですか？」と聞かれた場合、たぶん専門用語も分からぬであろうから

1日に30回の質問はされる。そして、もちろんその質問すべてに答えなければいけない。

おまけに、新人に締め切りまでに企画書も書かせなければならないのでその書き方を教えたり締め切りまでに出すように監視、指導をしなければならない。

要するに指導係は2人分の仕事をするようなものなのだ。

プラス面はコピーなどの雑用は新人がしてくれるのでそれらの雑用がなくなるといふぐらいの事だ。

私は早速その雑用を齊藤に頼むことにした。

「齊藤。あなた、これから齊藤ね。」一応あだ名を決めといひ。つて言つても苗字だが。

「はい…。」

「で編集部の端から端まであの手紙力ゴ持ちながら散歩して来な。

私は小さい段ボール箱、通称手紙力ゴを指差して言つた。

「どうゆう意味ですか？」

「伝言を集めて来いつてこと。新人の仕事だから。今、一番新しいの齊藤だから。『早く来ーい！』つて、そこら辺のむさ苦しいおつさんに言われる前に行つて来たら？それと、私以外の伝言を預かつたら、その受取人に渡す。私が受取人の伝言を預かつたらその箱に入れて一周回つたら手紙力ゴを持つてきて。」

「はい。」

齊藤は返事をするとすぐに手紙力ゴを持って編集部の散歩を始めた。むさ苦しいおつさんに注意を受けるのはよっぽど嫌なのだろう。

この頃の齊藤はまだ純粋だつた。

でも齊藤が『親を刑務所送りにした。』と言われるきっかけになつたあの事件の幕はもうすぐ上がるとしていた。

「伝言預かつてきました。」

斎藤はそう言つて手紙力口を私に渡した。

私は中身をバサツ！と全部取り出すと力口を斎藤に返した。

「元の場所に戻ってきて。それと1日に朝10時ぐらいに1回、午後2時ぐらいに1回は絶対に回ったといた方がいいよ。文句言われるから。」

「はい。」

「じゃあ今日は会議とか無いから今から今月の企画を考える。うちの雑誌はニュースとか、そうゆう系を取り扱ってるからまず新聞を見る。」

そう言つて、私は今朝の読売新聞を斎藤に1つ渡した。この新聞は会社の1階にある来客用の新聞なのだが誰も見ないので、掃除のおばちゃんに「これ、くれる?」と聞いたら「ああ。いいよ。」と言つて簡単にくれる。

そんな感じで今日は斎藤の分と自分の分、計2つを貰つてきた。

「大阪府、知事選挙…。あ。これいいかも！…あー。でも、この日は関口未来と高坂竜也の婚約会見があるんだ！今月はこの2大ニュースだらうなー。ねえ。斎藤、大阪府の知事選挙の記事、書いてみない？私、女優の関口未来の婚約会見行けるの私だけだから。書かなきやなんないのよ。どうする？」

「んー。よく分かんないです。」斎藤はそう言つた。

「大きいニュース取らないと元に戻されるし斎藤の今の指導係は私なの。あなたが業績を今、上げたつて私にプラス利益はないけど、もし斎藤が今月の出さなかつたりしたら私は、あのむさ苦しいおっさんに怒られるのよ。だから、それがイヤなら今月の大きいの一人で探しなさい。」

「無茶ですよ…。」

「私がなぜ、ここまで書つかといふと、企画出すまでの締め切りまで、あと18日しかないの。この期間から、さほど大きくないニュースを取り上げ、企画にするのは文章を普通のより読者が引きつくるようなのを書かなければならない。それは新人にとつては高度な技で、最低でも今までの経験上、編集長が『OK!』と言つまで新人の場合25日はかかる。要はもう時間がないのよ。」

「分かりました！やります。」

「でも何でいやそうにしたの？」

「これうちの親も出るんです。」

「あー。政治家さんだつたんだ。それでも取材はするよ。新人が取材なしで企画なんて上げて提出しても相手にしてくれない。『なめてんのかー！』って、もう一回書くハメになる。」

「戸辺さんは2回出したことつてあるんですか？」

「2回ね。1回目は新人時代、取材なしで書いて失敗。2回目は大きくないうねタで失敗。」

「そうですか。」

「取材は1人だよ。だから自由に自由な時間にやつていいよ。取材が嫌なら尾行して1日の生活拝見とか。どっちでもカメラは使用。本人を写しとくんだよ。そしてこの場合、主要のあなたのお父さん、瀬戸 遼介どちらかの取材だね。まあがんばれ。」

この時、小さなニュースを扱つて、わざと元に戻されたほうが斎藤にとつてはよかつたのかもしれない。

その方がいい夢を永遠に見ることが可能だつたかもしれないから。

純粹な斎藤のままだつたと思うから。

第3話（後書き）

瀬戸 遼介

大阪府、知事選挙に立候補した政治家。

斎藤隆一の敵にあたる人物。

第4話（齊藤恵実が見たもの）

私、ジャーナリストになつてもう1年経つのだが、ようやくウチの社のトップ雑誌の編集部に移動になつた齊藤です。

最近は、戸辺さんが私の指導係になつて何にイラだつてるのか分かんないけど怖いです。

で今日は1日尾行です。父の尾行です。やっぱり身近な人が安心なんだけど、でも父に『取材させてくれ』。『とまつり度胸は私には無かつたので1日尾行をすることにした。

今は午前9時。普通に選挙カーで『齊藤隆一です。』と演説つて言うの？

それをしていた。私はタクシーで後を追つた。写真は15、6枚撮つた。

午後2時。それが終わるとカフェに入つていった。私もバレないように入った。

何か会話をしていた。

私は盗聴器を、近くを通る際に父たちが座つてゐる近くにあつた観葉植物に分からぬよう、忍ばせた。

「でさー。奥野さん、このお金で選挙の票をチョイトイトイといジッテくれない？」

そう言つて父は黒い旅行カバンを机の上に上げチャックをジーと少しだけ開けて奥野と言う人に中身を見せた。私は中身を見るとして遠くの席から、ちょっとだけ体をずらし見てみた。

「…！」

大声を出してはいけないと思い息を飲み込んだ。

私が見たのは、たぶん1000万はある札束だった。
なんであんなものが？！

あちらでは奥野さんが物を確認して、

「こっちだつて、命がけでやつてるんだから。バレたら間違いなく
俺たちサツ行きなんですから。そんな簡単に言わないでくださいよ。

「やつてくれないか？」

「やりますよ。」

そういうつて奥野と言う人は黒いバックを手にとつてカフェから出て
行つた。

それを見送つた父もカフェから出て行つた。

なんなんだろ？選挙の票をイジル？サツ？意味が分かんない？そも
そも、その言葉の意味が分からないと。後戸辺さんに聞こつ。
そう思い、尾行のため、私もカフェを後にした。

第4話（齊藤恵実が見たもの）（後書き）

追加人物設定。

奥野 一志（オクノ ヒトシ）

恵実の父と、会話していた怪しい人。

恵実の父とどんな関係があるのか、分からぬ。

「戸辺さんー尾行してきました！」

朝9時。斎藤は私がデスクにカバンを置いた途端に『待つてました！』って感じで私のところに向かつてきた。伝言回収の途中にだ。手紙ガゴを編集部の真ん中の通路に置いたまま、私を見つけたと思つた途端に来たらしい。

「手紙ガゴ、通路に置きっぱなし。とつて来な。」

「はい。」

斎藤は取つて来ると、

「あの、聞きたいことがあるんです！」

「なに？」

「昨日尾行してたら、おかしな点がいっぱいあつたんです。」

「じゃあ、全部メモに書いて。」

「そう言って私はメモを渡した。

「どうしてですか？ 私、口で言いますよ？」

「口で言つたら周りに聞かれてネタ、盗られるよ？」

「分かりました。」

そう返事をした斎藤は私の隣の自分のデスクに座ると聞きたいことを書き始めた。

私はその間にコーヒーを自分の分だけ注いでいた。

「これです。書けました。」

私が帰つて来たら斎藤にメモを渡された。

「分かつた。読む。」

メモの内容は斎藤は純粹だと書つことが分かるもので、同時にどんなことが起こつていると書つことが分かつた。

内容は下のとおりだ。

昨日のおかしかった齊藤隆一の行動。その会話。

齊藤隆一『でさー、奥野さん、こにお金で選挙の票をチヨイチヨイ
トイジツテくれない?』

奥野『こっちだって命がけでやつてるんだから。バレたら間違いな
く俺たちサツ行きなんですから。そんな簡単に言わないでください
よ。』

齊藤隆一『やつてくれないか?』

奥野『やりますよ。』

こんな会話をして大金の入ったカバンを齊藤隆一から奥野と言つ人
に渡していた。

上のとおりです。私は大金を不意に見てしまって思わず、叫び声が
出るところでした。

でも頑張つてこらえました。

ところで質問です。

『選挙の票をトイジツテくれない?』とか『サツ行きなんですから。』
とかどんな意味か分かりますか?

この文面からして、齊藤は事の重大さを知らない。そして純粹だ。
サツ行き=警察に捕まる。

選挙の票をトイジツテくれない? = 選挙の自分に入っている票を本当
の数よりも多めにしておいてくれ。つてこと。要するに詐欺。

8割の可能性でこの可能性が高い。これは、齊藤隆一はどんな手を
使っても知事になるつもりだ。齊藤にとつては人生で1番、最悪な
ことになることだろう。自分の父親がこんなことをしているなんて

知つたら…。

私は困つた。でも齊藤のことだらうから言わなかつたで気にしない、なんてことはまず無いだらうから、私が言わない場合、言つてもネタを盗まれる心配が無い、編集長に聞くだらう。そつなつたら、もう私が言つしかないのだ。

「戸辺さん分かりませんか？分からなかつたら私、編集長に…。」

「齊藤。ちょっと外に出よう。」

「何ですか？まだ出勤してから10分しか、」

「いいから！」

私たちは、会社を出て外のカフェに入った。「コーヒーを2つ頼んだ。齊藤。齊藤が世界で1番、信用している人つて誰？」

「え？」

「いいから、何も言わずに質問に答えて。」

「よく分かんないです。時と場合によりますね。」 そつと齊藤は、さつさつ来たコーヒーを一口飲んだ。

「父親のことは？」

「ある程度は信用します。」

「齊藤。お願いがある。」

「何ですか？」

「さつきのメモの内容、聞きたいなら齊藤隆一を他人だと思つて聞いて。」

「はい。聞かせてください。」

「齊藤隆一は、どんなことをしても知事になるつもりだ。で、選挙の票を詐欺するつもりでいる。その協力人が奥野と言う人だ。サツ行きの意味は『下手したら、警察につかまる。』ってこと。」

「…そんな…わけ…ないです！」

そつと齊藤は走つてカフェを出て行つた。

その日、齊藤は会社には戻つて来なかつた。

第6話（斎藤恵実が見たもの）

戸辺さんの言つたのは私の父は詐欺をしてこるらしい。今日の朝、外のカフェで話を聞いて私は思わず戸辺さんを置いてしまった。心配してないかな？いくら戸辺さんでもするよね？いくら冷血人間でもするよね？

でも、そんなことより詐欺が本当だつたら、私どうしたらいいんだろ？

「ただいま。」

午後11時やつと父は帰つてきた。玄関に私は走つた。聞けばすべてが分かる。

「お父さん。選挙どうしても当選したいの？」

「ああ。知事になりたいね。だから立候補してくるんだ。」

「それは、たとえ詐欺みたいな事しても？」

「…どうゆう意味だ？」

「お父さんはそんなことしないよね？選挙の票、詐欺するなんて。」

「知つているのか？お父さんが、どんなことをしても大阪府知事になるつもりでいる事を。」

「本当なの？！だったら今すぐやめて…」

私は、叫んで父を掴んで握つた。

「知つてるんだな？」

その声その表情、もう父の面影は無かつた。

「私は、どんなことをしてもトップに立つんだ！」

異様な声で私は言つた。妖怪のような声で。恐怖感で声が出なくなりそうだ。

「…でも…そんなの…本当のトップじゃないよ…」

一頻の声で私は言つた。

「いいか？結果がすべてなんだよ。表がすべてなんだよ。裏で例えどんな事をやつていっても、表でバレてなきゃいいんだよ。」

「そんなの、もう人間じゃないみたいじゃない。お父さん今、悪魔みたいだよ？」

「うるさい！」

パン！

頬が痛い。ヒリヒリする。

「間違つてる！斎藤隆一のやり方は！間違つてる！」

泣きながら、でも私は必死に言つた。

ダン！

足が痛い。

ゲシツ。

おなかが痛い。背中が痛い。

でも、もう悲鳴を出す力も無い。

田覚めたらキッチンに居た。周りは血だらけだった。でも、それほど重症ではなかった。

痣が相当ある。虐待だ。

私は痣が見えないように化粧をし、服を着替え、いつもどおり出勤した。

外は、いつもと変わらない。それを感じてものすごく、ほつとした。

でも、父はもう、父ではない。

第6話（齊藤恵実が見たもの）（後書き）

（齊藤恵実が見たもの）といつのは恵実田線といつことです。

「おはよう」「ざいます。」

斎藤が来た。昨日、散々心配した。でも心配しても起こった事は変わらない。

斎藤がいつもと違う。私はすぐ分かった。

「本当だつたでしょ？」

「いえ。嘘でした！」

「嘘でしょ？嘘って言うの嘘でしょ？分かった理由は目が腫れてる。テンション低いし、私より出勤が遅い。挨拶した。香水してない。いつもは目がきれいで、テンション社会人のくせして高い。私よりも早く出勤して手紙カゴ持つて伝言集めてる。朝、私が来たら挨拶の前に、仕事のことを1番に話す。いつも欠かさず香水してる。」「そりや遅れることも忘れますよ。」

「私は一流ジャーナリストよ。人間観察はジャーナリストの得意分野。私は、そう簡単に騙せない。ましてや、あなたみたいな新人ならなおさら。どう？嘘って言つたの嘘でしょ？」

「…はい。問い合わせたら殴られちゃいました。えへっ。笑つていいですよ？」

「…笑えないわ。あなたはどうしたい？」

「…戸辺さんならどうしますか？」

「私はね、経験豊富よ。私の親友はタレントやつてたの。そして人気が出ないから、大物アーティストと結婚した。オトしたの。で、親友は浮気し放題。相手のアーティストは知らずに、私の親友を溺愛してた。のちにアーティストは浮気を自撃した。そして、アーティストからウチの編集部に電話が来た。出たのは私だつた。親友が浮気してるって内容だった。要するに、復習したかったのよ。私は記事を書いた。大きくトップページに置いてもらつた。そして、裁判になつた。親友とアーティストが離婚するか、しないか。私はア

－ティストに浮氣の証拠をタダであげた。私は親友よりアーティストの方に味方するのが正しいと思ったから。そして、アーティストが勝つて離婚。慰謝料をアーティストは請求した。だから、斎藤あなたが正しいと思ったようにしな。私はそれが正しいと思ったら全面的に協力する！」

「…私は訴えます！その前に私の意見を書きたいです！」
「分かった！ そうなるなら協力する。斎藤隆一を特集だ！ タイトル『大阪府知事選挙、立候補の斎藤隆一の真実！』で行こう。」「はい。」

こうして、戦争は始まったのです。

「写真、何枚ある?」「ちょっと待つてください。今、数えます。」

「ん。」

「34枚です。」

「わかった。」

昨日の朝8時頃から、今日の朝8時、ぶつ通しで昨日から斎藤と記事を書いている。こんなに仕事に熱中したのは3年ぶりだ。

「…戸辺さん。」

「何?」

「…私たち、昨日から寝てないですよ?」

「分かってるわよ。」

「このままじゃ私たち、ダカラのCMの速水もこみち みたいになっちゃいますよ!」んー。一理あるわ。

「確かに眠いね。」

「そうですね。」

「寝たら?」

「戸辺さんは?」

「朝ズバツ!見て寝る。」

「…じゃあ、おやすみなさい。」斎藤は、なんじやこの人といつた感じで私を見て編集部の端にいくとソファに寝転んだ。

ピッ。

私は編集部の端のテレビの電源をつけた。

『今日のニュースです。大阪府知事選挙まで、あと16日。斎藤隆一さんに話を聞いてきました。』ふーん。

『私はですね。この選挙に全てを賭けてますー皆さんのために私

は一生懸命頑張りたいと思います！税金を無駄遣いせず麻薬をなくし犯罪の全てを無くせるよう最善を尽します！どうか私に投票してください。』なにが犯罪を無くすだ。自分だろ！やつてんのは！ポチッ。

私は、さつきの映像を録画、ボイスレコーダーで録音した。ＴＶ局にもらつても良いんだが、時間がかかるので、大抵は録画だ。そして、記事に使う場合、許可をもらつ。これが、私流だ。

「さ。寝よ。」

私も寝むりについた。

「…わん！…辺さん！起きてください…」

「ん～？」私は迷々起きた。

「書きますよ！記事！」

「はいはー。」

「ひつて記事は勢いよく完成した。

「いよいよ今日発売だね。齊藤。」

「そうですね！で、いつもはこんな事するんですか？」

「いや！いつもは、ボーッと居る。編集部で。」

「でも、戸辺さん。私たち、かなり怪しいかもですよ？」

「いや…せんせん、怪しくない！」

現在8時30分ごろ。

私たちは自分たちの書いた記事が載っている雑誌が売れるのを確認する為、近くの駅の売店に来ている。

でも、遠くからただジーツと見ているだけじゃ怪しいので、売店でチヨコを買おうか、買わないかを悩んでいるような人を装いながら監視している。

周りから見れば、どつかのバンドの子がチヨコを買おうか悩んでいると言った感じに見えているだろう。

サンಗラスかけて、チーハーンとか付けて、ジーパン穿いて。どこからどう見ても今ドキの子の感じだ。

「戸辺さん。とにかくこの凄いカッコウ、何のつまつですか？私はこれ着るー。」と言われて言われるままに着て10分こうじてますけど、未だに何のつまつですか？

「今ドキのバンドでもやつてそうな感じの子。」

「…。今ドキって言うかこれ、80年代の不良って感じです。なんかアメリカンすぎだし、迫力あるし。」

「そう？」

「450円です。」

そんなことを言つてると、私たちの本が店から一つ旅立つていった。

「売れましたね。」

「ああ。」

そして、そのあと私たちが確認した分だけでも24冊の『芸能ホスト』が旅立つて行つた。
あとは世間から、どんな反響が帰つてくるか。

齊藤隆一の悪行が書かれた雑誌が発売されて3日。まあ、書かれた
じやなくて、書いた。だよな。

もつももれり、反応が出る頃だろ？と思ひ、ニュースを見る」とい
した。

ピッ。 みのもんたが出てきた。と思つたら、アナウンサーだつ
た。

『12月1日木曜日です。』 分かつてます。

『齊藤隆一議員が、詐欺をしていとの疑惑が浮上しています。文
楽社の『芸能ポスト』によると、齊藤議員は、第3者に票の方を本
当より多めにしておいてくれ。と頼んだらしく、第3者はそれを承
諾したとのことです。未だ本当かどうかは分かつませんが、どう
ですか？みのさん。』 やつた！

ピッ。

「齊藤。 出てたよ！文楽社の『芸能ポスト』つて！」

「知つてます～！凄いですよね～！」

ブルルルルルル。ブルルルルルル。ブルルルルルル。

私のところに電話だ。私は怪しまずに出た。

「はい。文楽社、芸能ポスト編集部の戸辺です。」

「アンタか！ デタラメ書いたのは！」 ものすごい迫力だ。と、思つ
たと同時にボイスレコーダーの電源を入れた。録音中と。

「あの、どちらでしよう？」

「齊藤隆一だ。戸辺 怜といふのは君か？ 齊藤 恵実とは誰だね？
出しなさい！」 こりや、チャンスだ！

「名前に覚えはありませんか？ あなたの娘さんですよ？」
「私の娘はそんな裏切ることはしない！」

「あなたは娘さんに暴行をしたのにですか？ よく言えたものですね

？」

「……とにかく…その斎藤という者に電話を代わりなさい。」

「少々お待ちください。」

私は斎藤に声をかけた。

「斎藤。斎藤議員から電話。代われって。横で聞いてたでしょ？言えるなら言つて。自分が娘だ、暴行を受けた、詐欺の現場を見たこと。これを明白に言つて。ボイスレコーダーに録音してるから。どうする？出る？」

「出ます！戸辺さん、お願いがあります。父を訴えること、出来ますか？私、あんなの許せません！」

「バッヂシ出来る。」

「じゃあ、出ます！」

「よし…」

「もしもし。代わりました。斎藤恵実です。」

「斎藤隆一だ。今すぐ訂正しろ！どこの誰だか知らんが！今すぐ訂正しろ！」

「…。娘に、どこの誰だか知らん。ってなによ？少なくとも、声と顔と名前は知つてるでしょ？親なんだから。暴力まで振るつたんだから、覚えるでしょ？痣がいっぱい。痛かった！…その、暴力振るつた理由は、私が奥野つて人に協力してもらつて、お父さんは選挙の票を本当より多めの結果にしろ！って言つたらしいね。表に出てなかつたらいいんだよね？でも、もつ出ちゃつたよ？」

「…。」

「返事にお困りのようで。では、切れます。」

ガチャ。

ピッ。

「録音完了。法律事務所の名刺…。あつたーはい。」私は斎藤に弁護士の名刺を渡した。

「かけるんですか？」

「もちろん。証拠あるつていいなよ。決定的な証拠はあるつて。暴行受けたこと。詐欺してること。両方、訴えられるよ。でも、ここからは私は助けられない。裁判は、訴える側と訴えられる者とその弁護士の問題だから。そこに電話かけて、この証拠を全部出しな。」

「はい。ありがとうございました。」

「この件はね。」

について、斎藤恵実は斎藤隆一を訴えることとした。

第1-1話（斎藤恵実が見たもの）

父を訴える。

普通の人はそんなことは無いだろう。でも私の場合、そうなってしまった。見てしまった。知ってしまった。

あんなことをして平氣でいる父が怖い。憎い。だから私は訴える。そして勝つ！

大野弁護士事務所

私はそこに電話をかけた。

プルルルルルル。プルルルルルル。

「はい。大野弁護士事務所です。」

「斎藤恵実といいます。父を訴えたいんです！」

「はい。まずは事務所に来てください。そして、話を聞きましょう。」

「はい。ではいつたん、切れます。」

「お待ちします。」

ガチャ。

こうして今、大野弁護士事務所に来ている。

キイ。

私は中に入った。

「お邪魔します。」

「…斎藤さん？」若い人の人だった。……戸辺さんに似てる。迫力が…。出来る女って感じだ。

「はい。斎藤恵実です。」

「座つて。事情を聞かせてください。」私は言われるがまま、ソファに腰掛けた。

「はい。私は新人のジャーナリストです。新人はデッカイネタを手に入れない限り、記事は載せてくれません。で、この頃、大阪府の選挙が行われるじゃないですか？私の父、齊藤隆一も出るんです。で、そのことについて記事を書こうと思い、取材は初めてだし、親にするのも恥ずかしいと思い、1日の生活を拝見する。といった形で尾行をしてたら、『選挙の票を本当より多めにしろ。』と言う父を見てしました。それがどうゆう意味か聞こうと思ったら、暴行されました。おまけに記事を書いて雑誌に載つたのを見て、父は私の会社に電話をかけてきました。それを本当なのに、『データーメを書いてくれたな。訴えるぞ。』と言つし、そんなの間違つてると思い、父に暴行されたのと、選挙の票について訴えたいんです！証拠は、たくさんあります！」

「分かりました。がんばりましょ。」

「はい。これ証拠です！」私は、全ての証拠を入れた封筒を渡した。

「分かりました。しつかり見ておきます。また明日も来て下さい。」

「はい。」

どうか、勝ちますよ！」。

あのあと、齊藤恵実は裁判を起こし、見事に勝利を収めた。慰謝料500万をもらい、齊藤隆一は、懲役5年。

そのあと、わたしは指導係の期間が終わり、齊藤とは、もう関わらない。

あの記事を書いたあと、齊藤は『芸能ポスト』でやつていくことが確定し、

その2カ月後、私は編集長になった。

ちょっと前まで、嫌つて言つぐらい齊藤の話を聞いていた。今は、ここ3カ月、話していない。最後の会話は、裁判所の前。裁判で勝つたという報告をお礼だった。

「戸辺さん。私、勝ちました。父親に裁判で。大勢の人の目の前で。父は懲役5年、私に慰謝料500万の刑でした。今までありがとうございました。今日で指導係、終わりですよ。知っています。戸辺さんが、指導係、嫌いなの。トイレの個室で、『疲れたー。』とか、言つてるのがよく聞こえてました。これは、私が、勝手に言つてるんじゃないんです。大泉編集長からの命令です。」

「たしかに、疲れたけど、いい体験をさせてもらつた。決して、悪いものではなかつた。」

「そうですか。では、私は会社に戻ります。」

「うん。戻りな。」

あれから、3カ月。

齊藤は、180度変わつた。完璧になつて帰つてきた。

齊藤は、私と話した後日から、1ヶ月休んだ。

1ヶ月たつて帰つてきた齊藤は、パソコンは、私の上をいくぐらいのレベルで、専門用語、礼儀、すべて敵無し。前はあんなにドジで、

質問攻め、廊下は走る。小学生レベルだった斎藤が、エリート中のエリートって感じになっていた。もう、私なんか話しかけられない！と思つてしまつた。唯一、話しかけていい人をあげるとしたら、社長とか？になるんじやないの？って感じになつて帰つて來た。

でも、私が斎藤の指導係だった、といつのはあまり有名ではない。たぶん、あのころの斎藤は、はつきり言つて目立つてなかつた。だからだろ？

なんで、あそこまで変わつたのだろ？…もう聞けないのだろ？

編集長、2日目。

只今、『芸能ポスト』の編集部は、原稿提出ラッシュだ！みんな、締め切り！締め切り！と焦っている。私は編集長感想の口ナリをせつせと書き、

売り上げ計算、その他、印鑑押して大忙しだ。でも、平社員のみんなに比べたら、企画を持たなくていい我社の『芸能ポスト』編集長は楽だ。

「出来ました。」

企画の原稿を提出された。齊藤恵実だった。

完璧だ！

「はい。OK。」

私は印鑑を押した。

「あのや、齊藤さん。話したいんだけど、今、時間ある？」

「はい。」

「じゃあ行こう。」

私たちは会社のカフェでコーヒーを頼んだ。

「話つて何ですか？」

「單刀直入に言つてなんで、そこまで変わった？」「なにがです？」

「性格。風貌。仕事のランク。すべて。」

「仕事のランクが上がつたら、利益が下がりますか？」 そうじゃない！口も巧くなつてる！

「いや。むしろ上がるけど、そつじゃなくて一変わつたよ。いい意味じゃない。悪いほうに変わつた気がする。」

「仕事にランクは上がつた。すること全て完璧。情報を私に持たせ

たら、決して流出しない。良い方に変わった。私はそう思います。」「

「そうじゃない。仕事面では良い方に変わった。でも、個性がなくなつた。以前の優しい感じの齊藤が消えてる。仕事が全てじゃないわよ。口ボットじゃないんだから、感情を持ちなさい。」「

「…このほうが楽なんです。心閉ざして、他人の心に入らず、自分の心にも誰も入れない。それが、私にとつて楽なんです。」「

「…そんなの、独りぼっちなだけじゃん。」「

「独りぼっちの方が、傷つかない。得るものもないけど、失うものもない。それがいいんです。」「

「でも、逆を言つて『らん？失うものもあるけど、得るものもある。

「失うものが大きすぎました。父の裏切りがあつて、暴力、父に勝利した。大きすぎます。」「…行こう！」「

私は、齊藤の手を引つぱつた。

「どこに行くのですか？」「

「いいからついて来なさい！」「

このときの私の行動は、齊藤の心にプラスになるのか、マイナスになるのか、分かんない。

でも、聞かせたい。あの、真実を。

第1-3話（後書き）

このじふ、なんに更新できてなくてスマセン！

第14話（齊藤恵実が見たもの）

戸辺さんに連れてこられたのは、刑務所だった。

「戸辺怜です。こちらは付き添いの齊藤恵実です。電話で話したとおり、齊藤隆一と面接お願いします。」

「はい。案内します。ついて来てください。」

私は、戸辺さんに企んでいるのか全く分からなかつた。

しばらくして、警官に面接室へ案内された。

薄いガラスの向こうには、父の齊藤隆一がいた。

バン！

「ヒツ…」

私と父は、戸辺さんが机に手をついた音にビックリしてしまつた。

「今から、言つことは事実です！よーく聞いてください！齊藤隆一さん、齊藤恵実さん…！」

「は…」

「齊藤 藍那。旧姓は、垣ノ内。齊藤隆一の妻、齊藤恵実の母。

齊藤藍那は、恵実さんを産んだ後、体調が悪化。もともと、心臓のほうが少し悪かつたから、だからだと思つ。

体調の悪い妻を隆一さんは必死に看病した。隆一さんは朝から昼は必死に働き、夜は藍那さんの看病。そして、恵実さんが、27の時、大阪府の知事に立候補して、絶対に何をしても知事なつてやる！と思つたことでしょう。

なぜかというと知事は給料がいい。生活に不自由しなくなる。恵実さんは知らなかつただろうけど、齊藤家の家計は、火の車だつた。

『え？ そんな訳無い！』と思つたでしょ？ 恵実さん？

隆一さんは、火の車も家計を隠すために、恵実さんにこんな現状を見せないために、たくさん借錢してた。そして、その借錢を自己破産してから、知事に立候補。当選するはずだつた。計画のおかげで。

計画どおりにいけば。しかし、恵実さんが取材で事実を知り、取り乱した隆一さんは、暴力を振るつてしまつた。よつて裁判になり、斎藤恵実の勝利。斎藤隆一は刑務所暮らしなつた！以上！……はあ。……はあ。」

喋り終えた戸辺さんは、息切れをしていた。一気に喋つて疲れたらしい。私は、聞いた。今、言つたことは？と。

「今言つたことはすべて事……」

「事実！……わたしが……独自に調べた！……はあ。」

「そうですか。」

「恵実。悪かつた。俺が悪かつた。すまない。」

父は、私に頭を下げる。

「私は、あなたを許さない！……でも、戸辺さんには感謝します。全て分かつてよかつたです。」

「……そう。……はあ。」

「……戸辺さん。大丈夫ですか？」

「一気に喋つて息、切れたんじや……」

「そうですか。」逆ギレしなくても……。

「……ふつ。」

こんなやり取りをしていたら、面会室の端にいた警察官の人気が笑つた。

「……戸辺 恵実さんは、毎日ここに来ているいろ、斎藤隆一さんに聞いてましたよ。なかなか言わない時は、なんとしてでも言わすぞ、！つて勢いで。そして、ここに23回目にきた時、1週間前かなあ？全てを知つた戸辺さんは、「自分で言つたらどうですか？」と斎藤隆一さんに言つてました。でも「言えない」と斎藤さんが言つたんで、今日、言つたんだと思います。戸辺 恵実さんは。」

「23回も來たんですか？」

「はい。私が見たかぎりでは。今日は24回目だと思います。記録が残つてます。思わず、この光景を見て、会話を聞いた私としては、

言つておいた方がいいかなと。」

「でも、それ言つて大丈夫なの？ 警官さん？ はあ。」

「いえ。言つたらまずいです。警官さんは「ひ」と言ひかやいけないんですけど、思わず…。」

「大丈夫よ。言わないから。はあー。直つた。息切れ！」

「ありがとうございます。」

「いいえ。言つほどのことじゃないし。騒ぎ起ししたくないし。」

「戸辺さん。私、頑張ります。もう、意地張りません。心に誰も入れないなんて言つてられません！ そしたら、誰の心にも入れないですし！ 感動がなくなっちゃいます！」

「そう！ 頑張りなさい！ でも、仕事のスキルは今までいいのよ！ それだけは戻さないで！」

「はい。」

「すいません。面会時間終了です。」

「はい。」

「つづいて、私たちは、面会室を出た。」

「さあ、原稿を書きなさい！ 編集長命令！ 企画書バッチシだつたわよ…」

「はい。」

全て解決したとは、言えない。でも私は、これで明るい未来に一步、近づいた気がした。

第1-4話（斎藤恵実が見たもの）（後書き）

次回、最終話です！

最終話（私のスタイル）

あれから6ヶ月。

私は小説本を出した。

『家庭内戦争』

私のしたこと、父の事を書いた本である。売れ上げは好調。今日は私のサイン会だ。

「斎藤先生！衣装に着替えてくださいー！」

「はーー！」

私は急いで着替えをした。

とうとうここまで来たか。私のやつたことが、当たつてたか間違つてるかなんて、誰もわからない。この本を出版した時、賛成の人が大半だったか、反対の人もいた。

もちろん、それは読者も同じだった。でも、今は反響が出てきて、こうして私のサイン会まで行われるようになった。すこし安心だ。

トントン。

戸を開いた音がした。

「戸辺よー斎藤ー！居る？入つていい？」

「どうぞー！」

ガチャ。

「おじやましまーす。」

「戸辺さんー！」

「頑張んなさいー！」

「はーー！」

「じゃあ、帰るー！」

「それだけ言いに来たんですかーー？」

「そう！」

「そうですか。」

「ちょっと顔見たかつただけ。仕事あるし。」

「そうですか。じゃあ、頑張ります。」

「うん。じゃ！バイバイ。」

こうして戸辺さんは帰つていった。

サイン会が始まつたので会場に入った。中には、人がいっぱい居た。

「大変でしたでしょう。頑張つてください！先生！」

「はい。」

「ファンですー！頑張つてください！」

「はい。」

といった感じで、いろんな人にサインをした。終つたころには、手が疲れていた。サイン会が終つた時、少し私はホッとした。いろんな意味で。

これからもいいものを書いていきたい。

ジャーナリストとして。人として。自分という人間として。

それが私のスタイルだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2154b/>

家庭内戦争

2010年11月27日06時35分発行